

「知事との元気まるごとトーク」(令和2年11月6日開催)

「知事との元気まるごとトーク」は、知事と地域で元気に活動している団体等の皆さんが、青森県の未来を創るために直接意見交換をする場です。

令和2年度3回目の「知事との元気まるごとトーク」を令和2年11月6日(金)に「蓬田村ふるさと総合センター」(蓬田村)で開催しました。

当日は、東青地域県民局管内の5名の方にお集まりいただき、「すき。Aomori Tosei ～移住・定住者が語る東青地域の魅力と課題」をテーマに意見交換を行いました。

当日の概要をお知らせします。

当日の出席者

青森県営浅虫水族館	イルカトレーナー	藤田 えみさん
平内町地域おこし協力隊		石野 孝さん
奥津軽いのしし牧場	代表	依田 啓夢さん
増尾農園 (蓬田村)		増尾 一洋さん
小林農園 (外ヶ浜町)		小林 辰徳さん

(知事)



皆さん、こんにちは。

冬らしくなってきました。青森といえば冬が本番というぐらい、冬がなかったら過ごしやすい所だと自分では思っていて、このように故郷の捉え方はいろいろありますが、あれが悪い、これがないと言うよりも、良いところを探しながら、その中で、不足していることを新しい考え方や仕組みで補って、皆でよりよく暮らしていけるようにしていくことが、青森県のテーマだと思っています。

そういった中で、今日は、青森を選んでくださった皆さんとこうして意見交換できることをうれしく思います。

仕事のジャンルは皆さん違いますが、現状それぞれ思っていることを話してもらい、しっかりと県の取組に生かしたいと思っています。これまでもこうしたやり取りで出たアイデアを毎年2件程度予算化しており、実は、こういう機会を活用してしっかりマーケティングしています。

そういうことで、今日はよろしくお願ひします。

(東青地域県民局長)

本日のテーマ「すき。Aomori Tosei ～移住・定住者が語る東青地域の魅力と課題～」の設定理由について説明します。

東青地域は、陸奥湾に面した豊かな風土と「食」をはじめとする各種資源に恵まれており、それらを活用した生業に従事している方が多くいます。

また、地域独自の歴史や文化に強い魅力を感じ、地域の活性化につながる様々な活動に積極的に取り組んでいる方もたくさんいます。

一方、県内では、特に高齢化の進展が著しい自治体もあるなど、地域を取り巻く環境は必ずしも楽観的ではありません。

そうした中、東青地域県民局では、一人ひとりが健康でいつまでも住み続けられる地域づくりを目指して、持続可能な地域づくりに資する様々な分野における担い手の確保と育成、安全・安心で優れた農林水産物の産地づくりと地域資源の高付加価値化、さらには地域の魅力づくりと広域観光の推進などに向けた各種事業を行っています。

そのなかで、昨年度から、「東青の『もの』・『こと』・『人』つながる地域の魅力発信事業」において、東青地域に移住・定住された方々について、皆さんの生業を中心に紹介する動画を作成し、地域に根ざした様々な魅力を情報発信しています。

今年度は、本日出席の藤田さん、依田さん、増尾さんなど移住・定住された方々からのメッセージに加えて、地域の交通・生活・楽しみなどの基本情報を併せて紹介する「移住交流促進ガイドブック」の作成を進めているところであり、今後、各地域の情報発信拠点で配布する予定であるほか、県外の移住・交流イベントでガイドブックを活用した PR の実施などを予定しています。

また、県では現在、2025年の超高齢化時代に向けて、誰もが地域で生まれ、地域で育ち、地域を助け、地域で安心して老後を迎えることができる「青森県型地域共生社会」の実現に向けた各種取組を平成29年度から進めており、東青地域においては、本日出席の小林さんの出身地である外ヶ浜町上小国地区をモデル地区として選定し、全世代が生き生きと暮らし、みんなで助け合う地域づくりに向けたお手伝いをしています。

本日は、先に説明した「東青の『もの』・『こと』・『人』つながる地域の魅力発信事業」を進める中でつながりのできた、東青地域に移住・定住されて農林水産・観光・地域づくりなどの各分野で活躍している皆さんと活発な意見交換をし、我々地域県民局の事業はもとより、県政全般に皆さんの貴重な意見等を反映させながら、今後も一緒に持続可能な地域づくりを進めていきたいと思いをします。

本日は、最後までどうぞよろしく申し上げます。

(藤田えみ氏)

移住のきっかけは、水族館でイルカを見て、私もイルカに携わる仕事がしたいと思いトレーナーを目指したことです。





大学の授業で水産資源について学ぶ機会があり、青森県では暖流系と寒流系の両方の魚が獲れて、全国的に見ても魚介類の種類が豊富な県だと知り、魅力を感じました。中でも、一番魅力を感じたのは、野生のカマイルカが、多い時で500頭以上見ることができるほど身近にいるところです。

この魅力をより多くの人に発信していきことができる水族館で働きたいと思い、青森市に移

住してきました。

住んでみて感じた魅力は、家の近くに産地直送のスーパーがあり、常に新鮮な旬の魚や野菜が安く手に入るところです。また、大自然に囲まれていて、常に新たな発見や刺激のある生活ができています。温泉、スノーボード、イルカウォッチング、山登りなどは、どれも都会にいれば一大イベントですが、青森県では日常的にできるところが強みだと思います。

現在、青森県周辺の海域に生息する哺乳類の来遊状況を解明するため、津軽海峡及び陸奥湾において、津軽海峡フェリーを利用した目視調査を行っています。調査では、水深データの比較を行い、出現する哺乳類の種類、時期、海域を把握しています。

そのほか、浅虫水族館にはジュニアクラブという活動があり、その活動の一つに子どもたちと野生のカマイルカを見に行くイベントがあるのですが、カマイルカや水族館を通して、子どもたちをはじめ、たくさんの人に青森県の水産資源の豊富さを伝えていけたらと思っています。

今後の抱負ですが、水族館でお客様と話をした時に、青森県にイルカやオットセイがいることを知らない方がけっこう多いので、ジュニアクラブのほかに一般の方への周知活動として、調査させてもらっているフェリーの乗客を対象に解説イベントを行ってみたいです。内容は、まず写真や映像でどのような生き物が見られるか、探し方などを含めて説明し、その後、野外デッキで実際に生き物を探すというものです。

今後は、引き続き調査を続けるとともに、地元の博物館相当施設として、解説も積極的に行いたいと思います。

県と取り組んでみたいことは、青森県の海でたくさんの種類の哺乳類が見られることをもっとPRしていくことです。青森県の海を守るために、何かをきっかけに現状を知ってもらうことが大切だと思います。青森県の海に興味を持ってもらって、海に生息する哺乳類についても考えてもらえたらうれしいです。そのため、水族館内だけでなく、水族館外でも一般の方への周知活動として様々な出張イベントを開催したり、海に生息する哺乳類の調査活動をしたりすることが一緒にできたらと思っています。

(知事)

本当に青森の海を好きになったんだとすごく感じました。

青森県は約800キロの海岸線があって、暖流、寒流の関係で、日本海、太平洋、津軽海峡、陸奥湾で生物の種類も違います。でも、みんな食べる魚は詳しいけれど、イルカやオットセイなどの哺乳類がいることはあまり知られていません。

海の生物が豊富なのは、縄文時代と同じくらい暮らしやすい環境があるからだだと思います。そ

れだけ自然が残っているし、漁業も資源管理型に切り替えてきたので、うまく資源を回しているのかなと思っていますし、今後も、この海を守っていきたいと思います。

提案にあった哺乳類がたくさんいることを知ってもらうためのフェリーでのイベントですが、津軽鉄道のアテンダントがガイド以外にスルメを焼いていることを思い出しました。お客さんが乗った時に、藤田さんのような方がいて、イルカの解説などいろんなことをするのは、すごく面白いと思います。

(観光企画課)

浅虫水族館の設置の目的は、観光の振興とともに、魚類、海獣類との触れ合いを通じた学習の機会を提供することによって、青森県の豊かな自然環境やそこに暮らす生き物たちの素晴らしさを身近に感じ、体験するところにあります。

特に青森県ならではの工夫もされており、生き物の生態だけでなく、トンネル水槽では、陸奥湾のホタテやホヤの養殖、サバやアジの群れを再現して、豊かな水産資源を活用した独自性のある展示をしています。また、海獣類も展示していますが、命をつなぎ考える水族館として、命の営みを感じられる取組を続けているところです。

水族館の活動は、青森県の海に興味、関心を持ってもらうことに非常に貢献しており、また、同時に青森県を代表する観光施設として年間約30万人前後の来館者が訪れています。そのうち、県内からの来館者が8割以上を占め、県民にも親しまれているものと考えます。

より知ってもらうための取組として、新型コロナウイルス感染症に係る緊急事態宣言などが出された厳しい時期にも公式のツイッターで「フウセンウオ」の動画を発信するなどし、メディアに取り上げられて話題となっています。

県としても、いろいろな広報媒体を活用するなど、積極的な情報発信や、県内外からの誘客対策に取り組んでいきます。

フェリーとの連携についても、情報発信などに取り組んでいきたいと思っています。

(広報広聴課)

津軽海峡フェリーではなく、むつ湾フェリーの話になりますが、交通政策課で「イルカいないかキャンペーン」などのイベントを夏にやっています。むつ湾フェリーでも一緒にやれるようなことがあれば、ぜひ協力していききたいということでしたので、よろしくお願いします。

(知事)

フェリーでのイベントは水族館の人手の問題があるので、これから詰めていく必要があると思いますが、来年の夏、イルカトレーナーがフェリーで解説するイベントをぜひ開催できればと思います。

(東青地域県民局長)

若干補足すると、東青地域県民局でも、津軽半島と夏泊半島をつなぐ観光ルートを作る取組をしていますので、そういった中で、フェリーと連携するイベントやコースを取り入れられないか検討したいと思っています。

(観光企画課)

青森県には本当にたくさんの食があります。その理由は、県南と津軽と下北に分かれて、津軽はりんご日本一だったり、涼しい県南ではながいもとにんにくが取れたり、下北では畜産やいちごを作っていたりと、地域ならではの気候風土があります。

海も日本海、太平洋、陸奥湾、津軽海峡、あとは十三湖に小川原湖に十和田湖で、みんな、すんでいる魚種が違ってきます。漁師の気質も違うと聞いたことがあります。

気候風土が違うので獲れるものも生業も違って、歴史とか人の気質も違って、すごい魅力だと思います。それが本当に青森の海だと思っています。魚もたくさん獲れるので、本県は魚介類の消費量が日本一のような感じです。スーパーでも大間のマグロやアンコウがすごく新鮮で、安い値段で買えるので、私たちも、これからその辺はどんどん売りにして、移住や定住を考えている方、そして観光客に青森を PR していきたいと思っています。

(東青地域県民局地域連携部)

藤田さんが移住して感じたような、都会の生活では味わえない食や自然、そして人情も含めた様々な良さ、魅力が青森県にはたくさんあります。

ただ、それは県民も、進学や就職で地元を離れてみないと気が付かないことが多いのも事実です。

そうした強みを、地域づくりや観光の面でどんどん生かしていきたい、そういう気持ちで東青地域では、藤田さんのように様々なきっかけで移住された方々の視点や経験を、これからの移住の促進や地域づくりに活用するために、昨年度から移住交流 PR 動画などを作成して、情報発信を行っています。

本日出席の皆さんにも出演してもらった YouTube の動画再生回数も順調に伸びており、日々、協力をいただいていますことに、この機会に改めてお礼を申し上げます。

(石野孝氏)

むつ市で生まれ、高校まで青森市にいて、大学から東京に出ました。最初、レコード会社に入って、その後辞めてフリーになって、いわゆる世間でいう放送作家として番組づくりなどをやってきました。青森市にいる両親が 80 代半ばを超えたので、帰らなくてはどういうことで仕事を探していたのですが、僕のような経歴の人が働ける場が青森にあまりなくて、どうしようかというときに、地域おこし協力隊のことを知りました。実際、平内町の方と会って話をしたら、大変感じが良く、この人たちとなら一緒に仕事をできると思い、昨年移住してきました。

ですので、皆さんと違って、「これがやりたい」ということが具体的にないままやって来ました。

多分、地域おこし協力隊の中では、僕が相当高齢なので、多少なりとも経験豊かなところがあるということで、何かやりたいことがある若い人たちがいたら、「こういうやり方がいいんじゃないの」というようなことを、多少話せるのではないかと考えてやっています。



今取り組んでいるのは、SNS のフォロワーを増やすことです。まだ大した数ではないので、偉そうには言えませんが。

平内の地域おこし協力隊は副業が認められていて、僕は、引き続き東京の番組のゲストブックキングをやっているのですが、「このゲストどうですか」とスポンサーに聞くと、必ず「その人の SNS のフォロワーは何人いるのか」と言われます。皆さん、今その人を取り上げる価値があるのかということフォロワーの数で判断しています。ですから、「人」だけではなくて「町」を取り上げる時に、その町のフォロワーは何人いるのかということになり、いずれはそれが勝負になっていくと思うので、そうなった時に立ち遅れないように今のうちからやっつけていこうとしています。

同じ協力隊にたまたま絵が描ける人がいたので、黒板アートで情報を伝えるという方法でインスタグラムを中心に取り組んでいます。

今後の抱負は、平内町には高橋竹山という偉大な方がいて、僕もそんなに詳しく知らなかったのですが、いろいろ調べたら、大変興味深い方ですごいなと思って、今、竹山に関して詳しく調べています。

まだあまり知られていない竹山の面白さとか、今の人から見て、実は格好良いと思える部分がたくさんあります。そのような魅力を僕らが掘り起して、平内の子どもたちが、格好良いから俺もこうなりたいというように、押し付けるのではなくて、子どもたちの方から自然に思うようにできないかなんかと思っています。

青森には、太宰治と寺山修二というビックな人がいて、彼らの資料館には人がたくさん来ていますが、残念ながら、高橋竹山はそうなりません。先ほど言ったフォロワーも全然いない状態なので、そこを僕らが、できればその二人に並ぶような感じにすると、平内町の魅力のアップや集客につながるのではないかと考えて、取り組んでいます。

(知事)

これからですよ。また竹山ブームが来ます。

(石野孝氏)

そうですね。渋谷に「ジャン・ジャン」という、ユーミンや吉田拓郎が売れる少し前に出ていた 70 年代の最前線のライブハウスがあったのですが、毎月、月末 3 日間とか 4 日間、トリが必ず高橋竹山でした。元々そういう 70 年代の最前線にいた人なのに、盲目で苦勞して津軽三味線を弾く人というイメージしか伝わっていません。その辺の格好良さは今ともすごくつながっているんで、そこをもう少し伝えたいと思っています。

(知事)

J ターンという形になるかと思いますが、何よりも、帰って来てくれてありがとうございます。

石野さんの年代になると、青森県で何をやって食っていくのかということが、本当に大きなテーマだと思います。

そういった中で、実は、宝が一杯あるのに発信されていないということで、それを地域おこし協力隊という制度で取り組んでくれてうれしく思います。平内町は、ホタテ、大和山、竹山という三つのすごいパワーがあるし、そのほかにも、すごく評価の高いゴルフ場があって、夏泊

半島にはとても面白い植生、植物もあるのですが、意外に情報発信できていなくて、どうしても青森や下北に行く途中に通過する場所と位置づけられている面があります。

高橋竹山にどれほど価値があるのかは、県外に行くと分かります。沖縄の青森フェアにスコップ三味線を持ってセールスに行くのですが、向こうのメディアの方も「昔、竹山が来てすごかった」「青森はやっぱりアートの地域だ」と言ってくれます。沖縄には三線などがあって、いろいろな芸術家がいるじゃないですかと言っても、「いやいや、竹山はもっとすごいんだ」といろいろな地域で言われます。

また、全国のイオンやイトーヨーカドーで青森フェアをやる時に、現地の津軽三味線の先生や高校生に演奏を頼むのですが、三味線の音がするだけで観客がワッと集まってきました。その原点もやっぱり高橋竹山だと思います。竹山は知らないかもしれないけれども、津軽三味線のすごさを全国に実は広げました。ぜひ、新しい切り口で、竹山の時代を作ってほしいと思います。

(地域活力振興課)

地域おこし協力隊は、本県では平成 24 年度に初めの方が来てから、現在、23 市町村に 66 人の方がいまして、様々な知識や経験、そこからの視点を地域の活性化に生かしてもらっており、県としても隊員の募集や定着を推進している中で、石野さんが今年から活動されていることに感謝します。

隊員の方に話を聞くと、自分のミッションをどう形にしていくのかとか、あるいは町内の人間関係とか、様々な悩みがあるようで、県としても、隊員になった方をフォローしていくため、様々な研修会や隊員同士で横のつながりが出来るような機会を作るようにして、隊員の皆さんを支援しています。

また、県では、移住にも力を入れていますが、地域おこし協力隊の方が任期終了後も引き続き本県に定着してくれれば、移住者のモデルや移住を考えている方にとっての良い参考になるのではないかとということで、地域おこし協力隊の皆さんの定着についても力を入れて取り組んでいますので、引き続きよろしくお願いします。

(観光企画課)

当課では、多くの県外の方々に観光で青森県に来てもらうために、青森の魅力的なものをいろいろ発掘して、マスメディアや SNS を活用しながら発信する業務を行っています。

やはり津軽三味線や高橋竹山は、本県ならではの魅力的な観光コンテンツだと私たちも思っており、津軽三味線の歴史や、高橋竹山をはじめとした津軽三味線の地位確立に貢献してきた偉人達の活動をまとめた資料を作成し、東京の駐在員を活用して、マスメディアにプロモーション活動をして、そこからテレビや旅行雑誌などに取り上げてもらっているところです。

あと、若者向けに、インスタグラム、フェイスブック、ツイッターなどの SNS をやっていますが、今年の 8 月 9 日、甲子園の日に、甲子園が中止になってしまったので、金木高校の津軽三味線部員に「栄光は君に輝く」を弾いてもらって、ツイッターで発信しました。

また、これも若者向けですが、来年 4 月に「ましろのおと」という津軽三味線をテーマにした漫画がテレビアニメ化されます。作者は八戸出身の方で、マンガ大賞も受賞したということですが、高校生が単身、津軽三味線を持って上京して、そこでいろんな人と出会っていくという青春ストーリーのようです。

テレビアニメ化もあり、この4月は、若者に津軽三味線が間違いなく注目されるので、これをチャンスと捉えて、いろいろ発信していきたいと考えています。

これから高橋竹山に関していろいろ研究・分析されていく中で、もし新たな魅力を整理されて、情報を共有してもらえれば、それをもってマスメディアに働きかけたり、県が運営している SNS で発信したりしていきたいと考えていますので、引き続きよろしくお願いします。

(依田啓夢氏)



私は山梨県の出身で、青森公立大学への進学を機に、2013年に青森県に初めて来ました。

在学中のゼミの活動で、2016年に北海道新幹線開業に伴って新しい駅が今別町に出来るということに注目して開業PRを行い、大学4年生の頃に人口減少が進む今別町を何とか活性化させたいと、思い切って卒業後に移住しようと決断しました。今年で今別町4年目、青森県8年目になり、ようやく津軽弁も分かるようになりました。

東青地域に住んでみて、やはり食と自然、それから祭り、人の温かさ、これが津軽の魅力だと感じています。ただし、その魅力をうまく発信できていないことが課題だと思っています。私が青森県に初めて来ると決めた時も、青森ではりんごを毎日食べているとか、言葉の壁があるとか、それぐらいしか印象がないという山梨県民が多かったです。

2年前から奥津軽いのしし牧場の事業承継をして、その他にも副業として海藻等の加工会社の袋月海宝で働いています。

私の住んでいる袋月地区は、青森県内でもトップクラスの高齢化率で、買い物難民という課題があるので、五所川原市内でご当地スーパーを展開している知人を月に1回呼んで、移動スーパーも実施しています。

また、今別町商工会青年部の部長として、町内の祭りへの出展のほか、同じく北海道新幹線の駅がある北海道の木古内町商工会青年部とも交流して、お互いの祭りを盛り上げるなど、いろいろコラボしていければと思っています。

今後の抱負としては、自分と同じような移住者を増やしていきたいということと、いのしし肉のブランド化をやっていききたいということです。まず、育てているいのししは、ジビエでもなく、いわゆる畜産動物の牛とか豚とか鶏とかとも全く違う新しいジャンルのお肉だということをもっと広く認識してもらいたいと思い、グラフィックデザイナーをやっている妻の協力を得て、今年からロゴマークやパンフレットを作りました。

また、今年から餌の工夫を始め、今別のぶどう農家からハチに食べられたり、糖度が上がらなかつたりしたぶどうをもらって、いのししに食べさせています。あと、妻の知り合いで減農薬のりんごを作っている農家からりんごをもらっておやつにあげています。料理人の方は食べている餌にすごく注目します。穀物系の餌をあげていたら味噌と合うというので、それではぶどうをあげたらワインと合うんじゃないかと考えて、ぶどうを食べさせることを試験的にやっている状態で、どんどん新しい発想で進めていければと思っています。

いのしし肉は鍋のイメージがすごく強いのですが、一年中おいしくて、安心して食べられるの

で、鍋に限らず PR していきたいと思います。ローストにしても、臭みもなく、すごくさっぱりした味になっており、その脂身は白肉や白身と言われるほどです。

昨日も青森市でイタリア料理をやっている方がいのしし肉を買っていったのですが、すごく繊細なお肉で、料理のしがいがあると好評でした。こうして直接、料理人の方とコミュニケーションをとるのは、生産者としてすごく勉強になります。今年、ワイナリーなどとの商談会がけっこうあるのですが、料理人やお店の方と話をする機会が少ないので、そういった場を設けてもらえれば、お店の方もですが、我々生産者も今後の勉強になって、お互いにとってすごくありがたいことです。ぜひ、応援してもらえればと思います。

また、今別町は高齢化が進んで、来年から農家を辞めるという方が多く、そうすると数少ない若手がすごく大変になります。後を継いでくれるなら土地もあげるといふ農家の方も多くいますので、そういった方々がいるうちに、継業をメインにして移住者を取り込むイベントをやってもらえれば、お互い助かりますし、チャンスだと思います。やはり、ウィズコロナ・アフターコロナ時代に地方はすごく注目されているので、新幹線があつて、飛行機もあつて、実は近い青森県ということで仕事の誘致も可能だと思います。

(知事)

今、いろんな事業承継がやられていますが、よくいのししの牧場に着眼したなと思います。とてもくせがなくおいしい肉なのだと思います。

それと、青森県の南部氏のルーツは山梨県の南部氏にあり、津軽氏のルーツも南部氏にあるなど、実際は、山梨県と青森県はすごくつながりがあります。依田さんも導かれるべくして来たのだと思っていて、来た限りは一緒に頑張りたいと思います。

移住については、最近新規就農者が増えて、年間 300 人近くあったり、そのうち I ターンなどによる新規参入の方が 100 人を超えたり、という状況になっています。様々な販路を開拓し、一戸当たりの農業所得を 2 倍に伸ばすことができた成果だと思います。市町村や民間事業者と連携して、青森県合同移住フェアを 1 月に開催する予定ですが、本県では、仕事の世話や家の世話まで丁寧に行うような仕組みを作っており、フェアには非常に多くの参加者が集まってきました。また、新農業人フェアというのもあつて、いろんなことにチャレンジしています。

(地域活力振興課)

県では移住にすごく力を入れていて、青森県合同移住フェアというのを毎年 8 月下旬に開催していますが、今年度は新型コロナウイルス感染症の関係で延期して来年 1 月に開催する予定で準備しています。

情報発信については、例えば、今年はお盆の時期に合わせて東奥日報の全面広告を出しました。情報発信には市町村の協力も必要なので、市町村の受入体制の支援も行っています。あとは、リモートワーカー向けのお試し移住ツアーなどもこれからやっていくこととしています。

また、移住まで至らなくても、関係人口とあって、その地域の課題に関わってくれるような人を増やしていく取組も行っています。そういったこともやりながら、移住する人を増やしていきたいと考えています。

(構造政策課)

合同移住フェアのほかにも、新農業人フェアという全国の都道府県等が一堂に会して出展するイベントがあり、そういったものに参加して新規就農者の確保に努めてきましたが、今年は新型コロナウイルス感染症の関係で、行事が中止になっています。

コロナはチャンスだということですが、確かに、都市では人口集中の危機感から地方への関心が高まっています。これから、そういった関心を追い風にして、新規就農者の確保に努めていきたいということで、今年はリモート方式の就農相談をやっています。

新しい生活様式に対応しながら、引き続き、首都圏での様々な取組、イベントを通じて、自然や食などの豊かさ、多様な生き方・働き方を実現できるという青森県の魅力や良さをしっかりと伝えていきたいと思っています。

余談ですが、東京から見ると青森県は少し遠いというイメージがあると思いますが、リモートだと全然距離が苦にならなくなります。実は、この間、リモートでアイルランド在住の方からも就農相談があったところでした。新型コロナウイルス感染症がなければ、なかったことだと思いますので、そういったものも積極的に取り入れながら、新規就農者の確保に努めていきたいと思っています。

(総合販売戦略課)

いのししの販売の話がありましたが、県では、全国各地で県産品フェアや、それに向けた商談会などを実施しています。

最近では、首都圏や関西圏の高級レストランでのメニューフェアなども開催しており、それとあわせて雑誌、例えば「料理王国」などと連動した情報発信に努めていますので、ぜひ、いのししも機会があれば、紹介していきたいと思っています。

また、県産品のブランド化という面では、やはり地産地消が一番大事になってくると思いますので、地元でも、ぜひ取り上げてもらい、それを全国に発信していくように進めていけたらと思いますので、引き続きよろしくお願いします。

(知事)

商工会活動で知っているとおりに、事業承継はなかなかうまくいかないことが多いのですが、事業の基盤がある程度あって、財務やマーケティングを理解している人が引き継いでくれば、非常にうまくいくので、UIJ ターンの方を含めて、21 あおもり産業総合支援センターでマッチングする仕組みも丁寧に整えています。創業・起業についても、伴走型といって、銀行の借入を含めて応援をした結果、年間 10 人に満たなかった創業者数が、現在は 100 人を超えるようになりました。

依田さんは、そうした中でいのしし牧場を受け継いでくれて、ただ生産するだけでなく、販売の段取りも自分で行い、事業承継だけどまさにベンチャー企業のように取り組んでくれていて、とてもうれしく思います。

本県では、例えば、大鰐で作るハムが流行っていますが、「俺が一番おいしいものを作る」という人がけっこう出てきて、それを作って売り出していくというのが青森の良さ、特徴だと思います。本当に期待しています。

(増尾一洋氏)

青森に移住して5年目になります。当初、2割ぐらいしか分からなかった津軽弁ですが、7割ぐらいまで何とか分かるようになり、ようやく地元にも馴染んできた実感しています。

農家としては3年目です。まだまだ勉強不足で、周りからはミニトマトはそこまで難しくないと言われるのですが、実際、商売としてやってみるとなかなか難しく、計画的に生産して、品質の良いものを安定的に供給していくのは大変な仕事だと分かってきたところです。



本日、言いたいことは二点あります。

まず、新規就農に当たっての私のつたない経験からですが、私も東京の新農業人フェアなどに2年ぐらい通って、いろいろな地域の研究をしました。新規就農は生計が立つかどうかが一番のポイントになりますが、栽培規模と所得のモデルや、初期投資がどれぐらい必要か、利用できる補助事業や融資はどのようなものがあるかといった情報をパッケージで出している地域がありました。その地域では、例えば、トマトやミニトマトならビニールハウスが何棟必要で、それには2千万円必要で、そのうち半分は行政から補助があるので初期投資は1千万円で、その資金をどうするかを解説したり、就農後のいろいろな補助制度を紹介したりしていました。そこはかなり人気があるようで、「問い合わせが多いので、申し込むなら早めに」と言われました。実際、就農してみて、そういう経営面でのバックアップをもう少し丁寧にした方が、新規就農者が早く就農できるのではないかと思います。

もう一つは、日々、全国の人においしいトマトを味わってもらいたいと思い仕事をしていますが、実際、農業をやってみて経営面でなかなか厳しいと実感していることです。ミニトマトは、高収益な作物で、実際に面積当たりの収入は高いのですが、だんだん産地間競争が激しくなってきました。特に北海道などで夏秋産の栽培面積を増やしてきました。青森県内でも、津軽の方などで夏秋産がかなり増えてきていますので、全体的に飽和状態、価格も低下傾向で、この先もこうした傾向は変わらないという気はします。それをどのようにカバーしていくのかを、仲間と相談しながらやっているのですが、設備投資や人件費の問題がなかなか難しいと思っています。

それに加え、近年の温暖化による高温障害なども段々問題になってきています。今年は、なぜここまで価格が安いだらうと思いました。

こうした課題については、農家や農協の部会が自分たちで努力をして打開していくべきだということは十分承知していますし、既に県でも、いろいろな施策や指導でバックアップをしてくれているのですが、ぜひ知事にもうひと肌脱いでもらい、産地としての東青地域をもっと強化してくれればありがたいと思います。

具体的には、生産量を増やして品質をあげて、青森県東青地域のトマト、ミニトマトは非常に品質が良く、値段でも全国的に他産地と勝負できる、というような産地としての力をもっとつけていきたいと思っています。

もちろん、農家、農協、いろいろな仲間で行うことが前提ではありますが、個人の力だけではなかなかできませんので、ぜひ、行政でも旗を振って、具体的な施策でバックアップしてもらえれば大変ありがたいと思います。

そういった取組の結果、青森でトマトを作れば儲かる、十分暮らしていける、ということになれば、自然に人が集まってくると思います。そういった地域づくりを、一農家ではありますけども、目指していきたいと思っています。

蓬田村というのは、私も移住を検討する前は全く知らなかったのですが、いろいろな御縁で来ることになりました。皆さんの助けを借りて今があると思いますし、この御縁を大事にして、地域貢献をして恩返ししたいと思っていますので、ぜひよろしくをお願いします。

(知事)

蓬田村は、青森市が近く、いろんな意味で野菜を作りやすい場所だと思います。自分がかつて町長をやっていた百石町も、八戸市と三沢市の間なので作ったものを売りやすい場所でしたが、ヤマセで米が駄目なので、いちごを作ったり、一部の農家は、ミニトマトを作ったりしていました。

夏秋トマトは、熊本の技術と甘さ、美味さを目標にしていますが、出荷時期がずれるから、熊本、福岡、愛知、北関東などと産地のリレーを形成して、うまく本県を産地にしていこうという思いがあります。

もう十数年前に中南地域でミニトマトの生産を始めたのですが、最初はほとんど失敗しました。その後、りんごだけじゃなくて、複合経営が必要だと理解してくれて、ミニトマトもすごく品質が上がってきたし、それからアスパラが作られたり、北の方はブロッコリーが作られたり、様々な野菜を生産するようになりました。

そういった状況ですが、これからもミニトマトは需要があると思っています。消費者としても食べやすく使いやすいし、我々もだし活や健康づくりの大会で、健康のためにミニトマトをあと1日5個、50グラム食べてくださいとキャンペーンをしています。

いろんな用途で今後もいけるとと思っています。ただ、うまくリレー出荷をやっていくということと、先ほどの青森のミニトマトのおいしさのイメージをどれだけ高めていくかということが重要だと考えています。

蓬田村は、トマト、ミニトマトの産地として県内では有名で、名うての生産者がいて、昨日まで料理研究家の大原千鶴さんが本県に来ていましたが、あるのを全部欲しいといって持って帰ったぐらい、おいしさにびっくりしていました。蓬田村は元々技術が高いところですが、県全体としても、何とか、玉ねぎとトマトの分野は、もう少しロットを増やし産地形成して打って出るように進めていかなくてはと思っています。

産地化の可能性はあると思いますし、農業の中でも、トマトの分野とか水耕栽培の分野とか比較的入りやすいということがあるので、良いところに目をつけて頑張っていて、本当にうれしく思います。一緒にPRなどもいろいろやりたいと思っています。

トマトは、我々にとってとても重要な戦略物資で、また、機械化しやすい部分もあるので蓬田村中心にチャレンジしていますが、今後も攻めまくろうと思っています。

農業については、一戸当たりの農業所得を2倍に伸ばすことができ、それで毎年300人近く就農してくれていますが、これからももっと良いものを作ってもらって、それをブランド化して売っていき、これからも農業で食っていけるように頑張りたいと思っています。

(構造政策課)

新規就農の必要な情報をパッケージで示したらどうかという提案に対してですが、お配りした「新規就農ガイドブック」を御覧ください。

ガイドブックでは、青森県の主な作物の収益一覧を載せており、トマト（夏秋）が68万3千円、ミニトマト（夏秋）が307万4千円など、一応の目安を示しています。あくまでも経験と技術のある農家が作った場合、これくらいになるのですけども、就農当初の販売の粗収益等は6割程度を目安としてくださいと書いています。

新規就農の意志確認としては、なぜ農業をしたいんですか、その場の思いつきや現実逃避になっていませんか、いろいろなリスクを考えましたか、など少し厳しいことも書いていますが、まずは意志をしっかり固めた上で就農してもらいたいと考えています。そのほか、就農までのロードマップを示したり、技術や経営ノウハウの習得ということで、研修制度を紹介したりしています。

資金面では、無利子の制度資金がありますので、資金活用の手順や、資金借入に当たっての保証人とか担保とかも必要になりますという注意も書いています。

機械やパイプハウスなどの施設の取得については、国の助成制度や青森県の助成制度を紹介しています。

最後には、何か困った時に相談する就農相談の窓口の一覧等を載せており、新規就農者の方に必要な情報を一冊でという気持ちで作っています。

両親が農家の方はいいのですが、基盤がなくて新規参入される方は、どうしても最初は本当にきついと思います。それで、増尾さんもいろいろ御苦労されていると思っています。

最近では、新規就農者が増えてきていますので、ぜひ、増尾さんや昨年度の若手農業トップランナー塾で活躍された奥さんには、新規就農者にアドバイスなどをしてもらい、一緒に次の新規就農者を育成していきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

(知事)

若手農業トップランナー塾の制度を作ってもう13年ですけど、本当に意欲のある方々が入ってくれて、横のつながり、縦のつながりで連携してくれて、さらに立志挑戦塾という商売をやっている人たちとも連携するようになってきて、本当に強くなってきました。

(農産園芸課)

蓬田村をはじめとして、本県は、夏秋期に高品質なトマトが生産できる産地として、市場の方から高い評価を得ている一方で、高温障害による収量や品質の低下などが課題となっています。

このことから、県産業技術センターやJA全農あおもり等との連携を強化し、県やJAの指導員を対象にした高温障害や省力栽培技術に対応した技術や指導方法の習得を図っているほか、地域の課題等を共有するための現地検討会も開催し、生産者の方々への指導体制を強化しています。

今後も引き続き指導力の強化を図っていくことで、生産者の技術力と産地力の強化につなげていきたいと思っています。

また、産地づくりには欠かせないパイプハウス等の導入についても支援策を準備しているので、相談してもらえればと思います。

(総合販売戦略課)

産地間競争が激化しているという話がありましたが、県としては、引き続き県産品を優良販売できるように PR に努めていきます。

ブランド化、差別化については、やはり味や品質が非常に重要になってきますので、引き続き高品質な生産に取り組んでもらえればと思いますので、よろしくお願いします。

(知事)

本当にトマトは有望だと思っています。

青森県で高温障害が出るなんて、本当にこの気象変動の速さにドキドキしています。ただ、そのおかげで9月には桃を作るなどいろんなものが出来るようにもなりました。

(小林辰徳氏)



私は、高校を卒業してすぐ実家の農家の手伝いに入って農業を継ぎ、父、母の指導のもと今14年目になります。作っているのは、主にねぎやにんにく、赤かぶで、また、ハウスでもミニトマトなども作っています。

先ほどの話にもあったのですが、農家を継いでみて感じるのは、後継者不足という問題です。私の住む上小国地区は法人化が進み、周りは法人ばかりですが、その中の最前線で頑張っているのは

60～70代で、あと10～20年後にはやる人がいないのではないかと、せつかく法人化したのにその跡を継ぐ人がいないのではないかとという心配があります。また地域にも若い人がいないので、同じ農家としても、相談などを気軽にできない状況です。

県でも、新規就農の取組をしていて、先ほどの新規就農ガイドブックにもすごく良いことが書いていたと思いますが、足りないと思ったことが一つだけあります。例えば、ミニトマトだったらこういう作業があって、こういう時が一番忙しいなど、年間のスケジュールみたいなものがあると、新規就農の人たちにもすごく参考になると思います。例えば、にんにくはこの時が忙しくて、この時は少し暇だとか、分厚くなってもいいので、そういう指標のようなものが詳しく載っていると、それを参考にして就農しやすくなると思います。

また、自分で農家をやって切実に悩んでいるのが、サルが農作物を食べてしまうことです。私が就農してすぐの頃はそんなにいなかったのですが、ここ5～6年でサルがすごく増えました。1～2頭で食べに来るのではなくて、20～30頭ぐらいで一気に畑に来て、作ったものを食べられるという被害がずっと続いていて、これではいけないと思い、なるべくサルが食べないもの作付けするような工夫はしています。私が住んでいる地区のほかにも、平舘や三厩などでも被害に遭ったと頻りに聞きます。最近、青森市の新城でもりんごが被害にあったという話も出ているので、サルの問題は、これから新規就農を考える人にとっても大事だと思います。

せつかくおいしいものを作っているなので、サルの対策は、県でも何かしら対策をしてもらいたいと思います。

最後に、先ほどの増尾さんの話とも重なるのですが、今、自分がメインで作っているにんにく

が、最近、価格の下落がすごくて半値ぐらいになりました。確かに、野菜なのでそれはしょうがないとも思っているのですが、せっかく青森県産にんにくというブランドがあるので、知事の力で何とかにんにくを今以上に盛り上げてほしいと思っています。

(知事)

農作業の年間スケジュールの話はよく分かります。例えば、夏秋イチゴを作ると、特定の時期は寝ないで稼がないといけないとか、野辺地のこかぶの収穫は午前 1 時から作業しないといけないとか。その後は暇もできますが、繁忙期が重ならないように、作物の上手な組み合わせが必要になるので、これはあった方がいいと思います。

サルは驚きました。今まで、どちらかといえば下北だったのですが、本当に増えてきているということで、担当課から説明してもらいます。

にんにくは、前は本県が独占していましたが、他県が真似して少し作るようになりました。青森県産にんにくのブランドは強いのですが、ロットが増えたので価格が下落傾向になって、それで我々も種をまた改良して、大きくして勝負しようと思いました。

昔、中国や韓国のにんにくと戦った時は、向こうは安くて小さい、うちは、大きいものということでもうまくすみ分けました。また、黒にんにくを作るなどして生き延びてきました。

今後は、にんにくの種で勝負する部分のほか、黒にんにくプラスアルファの加工も考えなくてはいけないと思い、何かもう一つまい策がないかと考えています。この世界は、何かやれば必ず真似してくるので、常に前向きな戦いが必要になります。にんにくは圧倒的に青森というブランドがあるので、いかにしてこれを高めていくかだと思えます。

なお、津軽地域のにんにくは、若干ブランド力が弱い。ただ、非常に良い土があるので、いかにしてキャンペーンするかということを担当課から話してもらいます。

(構造政策課)

作物の年間のスケジュールについては、実はそういう資料もあります。ただ、小林さんのように経験を積んだ方であれば、今年の天気から生育が何日くらい遅れるなどの勘が働くと思いますが、新規就農者の場合はなかなかそういかず、スケジュールを鵜呑みにされると困るので、個別の事情あるいは地域の特性・気象等に応じて指導していかなければいけないということで、各地域県民局に就農相談窓口を設置して、普及指導員がマン・ツー・マンで対応しています。

具体的には、どんな作物を作るか、また、いつどこで栽培技術を習得するかなど、就農する時の計画の作成支援を行うほか、新規就農者のところには日頃から巡回し、個別指導や情報提供をしているところです。

あと、新規就農者が周りにいなくて寂しいということでした。上小国地区は、去年、農林水産大臣賞を取った集落営農の優良事例ですが、高齢化が進んでいますので、そこに新しい人が入っていかなければならない時に、小林さんのような方が受け入れて指導してくれると大変心強く思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

(食の安全・安心推進課)

サル対策について、やはりサルは賢いものですから、被害の対策は大変だという声は聞いています。

対策ですけれども、国の枠組みで、現場に近い市町村が中心になって、県はそれを支援するという仕組みになっています。県は町でやっているサルの捕獲、追い払いを国の交付金を活用して支援していますし、現地の課題解決に向けて、市町村の職員や猟友会の方を対象とした研修会等を開催しているところです。

今後も市町村と一緒に課題の解決に向けて取り組んでいきたいと思えます。

また、国の交付金で、一定の条件があるのですが、電気柵の設置や、集落の環境整備としてサルが来づらい環境を作ることなども可能ですので、役場と相談してもらえればと思えます。

(総合販売戦略課)

県では、大手量販店と連携して、全国各地で青森県フェアや卸売市場へのトップセール等を開催していますが、本県の「きれいな水」、「日本一健康な土」、正直で技術力の確かな「人」、この3つの基盤づくりを基本にして、農林水産物や加工品づくりに取り組んでいることなど、県産品の優れた価値や作り手の思いを流通販売関係者にしっかり伝えることに取り組み、適正な価格での取引を働きかけています。

県産品の優良品販売のためには、先ほども申し上げましたが、良食味、高品質生産が基本になりますので、協力をよろしくお願ひします。

(知事)

今日お集まりの皆さんは、それぞれ選んだ仕事で、この青森で頑張ってくれていて、本当にありがとうございます。

今、青森県では、多様性と可能性の両方が高まり、いろんなことに挑戦できるチャンスが広がってきています。

特に創業・起業がどんどん増えて年間100件を超えて4年ぐらいになりますけども、それだけ実は、細かい経済が回り出してきていたのです。そこに、新型コロナウイルス感染症の感染拡大で打撃を受けたのはすごくショックでした。

そういう中でも、創業・起業の支援として、新型コロナウイルス感染症対策としてのビジネスを考えて、いろんな工夫をしています。新しい世代の方々は、役所が考える支援メニューの上をいくというか、自分自身がどうやって生きるかよく考えて、いろんなことに取り組むようになってきています。やはり時代が変わったんだなって思えます。

創業・起業が増えると同時に、農業のUIJターンも増えてきています。長年、うちの農林水産部と、とにかくいろんなところに売って歩いて、販路を作って、農業産出額3,200億円を達成しました。これも絶対維持していきたいと思っています。

そして、青森県は経済人はあまり出ていませんが、独特の文化人は出ているし、武道の世界でもいろいろ出ています。人が面白いのが青森で、その面白さがもっと伝わると、沖縄のようにイメージが変わってきて、青森ってすごく面白そうなところだということにつながると思えます。経済だけでなく、やはり文化の光も見えてこないといけません。そういう意味で、水族館もよろしくお願ひします。

いろいろ話しましたが、青森ってやはり面白いと思えます。ある程度食えるようになって、暮らしていけるようになったので、この勢いを失わずにいくためには、皆さんのパワーが必要です。これからもよろしくお願ひします。ありがとうございました。

